



第五章 「ウテナニフス」

1

「それは、危険な賭けですよ」

夏の盛りの中、座敷に座すのは円顱の僧衣。その姿と声から、この人物が尼僧だと知れる。

ひぐらしの鳴く薄暗い一室で、尼僧と正面から対しているのは、春花だ。

尼僧の言葉に、うれいに耐えるように緋色の瞳のまぶたを伏せる。

「わかってはいるつもりです」

正座の姿勢をピンとしたままの姿が年を重ねた事を感じさせない尼僧が、重々しく息を吐いた。

それは、この坂本春花という人間をよく知っているからこそで、『仕方のなさ』を多く含んでいた。

尼僧は思い返す。彼女――春花は、昔からこうして時々、突拍子もなく周囲を騒然とさせることを行動に移そうとする。尼僧は、昔から変わっていないその部分を見せる春花に、しかし、苦言を呈さない。同時に、そうしたところが、春花という人間――ひいては武侠の強味となり、また周囲の人間には魅力となって、これまでの彼女を築きあげてきたのもまた確かだからだ。

「可能性を論じるのは、詮無いことかもしれませんね。しかし、うまくいかなかった場合、あなたがどうなるかは揺るがないとしても、獅士堂の組がどうなるか……そして、シマや郷、ひいては堅気の民衆がどうなるか、それを心得たうえでのことだというのですね」

「はい。私の賭けが敗れた場合を、私は視ています。だからこそ、賭けを行いたい。私は、それをあの娘に託したいのよ」

あの娘――。春花の口にする、娘とは。

「雪絵、ですか」

「はい。私の大切な娘ですね」

声に慈しみを含む春花に、尼僧は眉間にしわを寄せて、言う。

「それで、その子に重荷を背負わせることになるかもしれない道——否、賭けですよ。なにより、あなたはその愛娘ともっと共に在りたいと、そうは思わないのですか？」

一瞬、カナカナという蟬の声が途切れる。部屋の中には、静寂が満ちる。それほど遠くない距離で、低く読経が連なっている。春花は、くっと、口唇を噛んで、しかし、息を呑みこんで言う。

「……獅土は、我が子を千仞の谷に突き落とし、その幼子に試練を与えますよね。けれどそれは、子減らし、口減らしのためじゃあない。自らの子を愛しているからこそだと、そう思うのです」

別に苦難を与えたくて、こんなことをしたい訳ではないですがね、と春花は開かれた襖の先——空を見遣る。

茜色の空に時折小さな鳥が連なって横切っていくのを、なんとなく瞳に映した。

尼僧は、春花の語る話の筋は理解できていた。今は、薄く茶色のようになったかつては視た瞳で、自分もそうした時代を見据えた意志を持った。だが、今回の春花の決断と、そして行動は、かつての争乱の時代の再来を予感させてならない。

もし、その賭けに敗れることが実現となったならば……。

静かに、尼僧も空を視る。

「かつての『汀』を知っているでしょう。あそこが消滅したのは、私たちが東西で相争った故です」

「昔話ですか？ 老けましたか？」

「この粗忽者……。ふふ」

この子と軽佻な遣り取りをするのも、随分と久しぶりだな、と尼僧は小さく笑う。口許を袖で隠し、咳をひとつする。昔から、春花に対して威厳を保つには苦労した。

「それを繰り返すようなことがあってはならない、という話です。まあ、今度二大家が争うとしても、やはり今の境界線上なのでしょうから、あそこの人達は迷惑な話でしょう」

「堅気さんにも、そして、今は西方から入ってきた方々にも、もしかしたら迷惑をかけることになるかもしれない……。それも承知しているつもりです」

「そうですか……？ 本当に分かっているのですか？ それは、未来視を持つ者のエゴに過ぎないのですよ？」

風体が尼僧でありながら、それを裏切るような鋭い、人を殺せそうな視線を投げかけてくる彼女に、春花は表情を変えるところがない。

「かつての争乱の時代の契機となったのは、獅土堂の頭梁が辰ノ神に殺されたことですが、それにしても、それ以後の多くの頭梁が入れ替わった時代だって、彼女たち獅土堂緋蓮のエゴでなかったとは言えないでしょう。まあ、先代は民衆のためにを第一に力を使ったのは確かですが」

「そうした敬意を払うべき先達のことはいいのです。肝心なのは、なら、あなたは自らのエゴで組や郷を左右してもよいと考えるのですか？」

春花を見詰める目つきは、相変わらず斬り付けるように鋭い。春花は、その視線を気負うことなく、当たり前を受けて言う。

「私はね、おそらく初代の次くらいに自らの未来視が遠くを予見していると知っています。だからこれは、あの娘と、その先のための賭けです」

なにより、と春花は瞼をしかとあげて鮮やかな緋色の瞳で尼僧を視る。

「視てしまった私が、臆病風に吹かれる訳にはいかない。私は、私がなによりあの子に勇ある背中を見せなければならないのです」

「……………」

「それにやはり、これは良い面の可能性にも目を向けて論じても良いと思います。賭けに敗れた時のことばかり後ろ向きに考えても始まりません。一つの未来として提示されていることならば、尚更に」

「……まあ、あなたもよい歳ですからねえ。独りの夜に耐えられる女でも、昔からなかったからねえ」

「あら？ 尼さんがそんな風なことを言って、問題にならないのかしら？」

二人は小さく笑い合った。

「可能性.....ですか。うまくいけば、確かに両家のいがみあい、憎しみ合う連鎖はやむかもしれません。それは、これまでの一世紀近くに渡り、両家の争いで散って行った命たちが報われ、うかばれるということでもあります.....」

しかし、肝心なのは、そこではない、と尼僧は考える。この獅士堂の現頭梁、坂本春花は、賭けに勝つかどうかを、本当のところはどうでも良いと思っている。彼女の視ているのは、恐らく、更にその先.....。獅子の試練そのものだ。

「自らを滅ぼす行為に身を委ねる。あなたがそんな願望を持っているとは、言わない。むしろ、あの娘と母子になれて、それをたまに来て話すあなたは、とても幸せそうでした」

今度は寂しそうに目を伏せる彼女に、春花は優しげに微笑む。

「そうですね。幸せでした。けれど、幸せだからといって、それで自らの視た必定に従順であることが良い道であるとは、私は必ずしも言い切れないと思います」

「慾深いことです」

「人は、より良くを目指し、努力し、向上するのが生の意義だと考えます。私は、それが周りから視て火遊びだったり、突拍子もないことだったりしただけの話かもしれません」

迷惑をかけどうしですが、と春花は子供のようににはにかむ。

「あなたの必定は、あの娘と巡り合い、母となったことで、抗い、覆せたものかと思っていましたが」

「あの子との出逢いは、幸運でした。私が産めなくなった必定を、それは覆してくれたでしょう。しかし、私の命の答え——価値としての、必定への抗いは、まだ果たされていない」

「それを今すべきだと？ あなたは、母子としての時をもっと持っても良いのでは？ あの娘には、まだまだあなたが必要なのでは？」

胸に手を当て、息をゆっくりと吸い、吐く春花の仕草は、実は尼僧との会話

で自らが昂ぶっていたからだ。

「私はね……先代が自らの治政よりも、武俠として見せてくれた “人を想って戦うスガタと心”、尊意の大切さを私の代にまで遺してくれたことが、今につながる治政と同じく、大きな成したことだと思っています」

心を静かにさせて、春花は言う。

「そして、私の代でもし成せることがあるのならば、それは、勇を以って行動し、尊意と愛のままに刀を振るい、そして必定に抗いうる、という事をどうにか示すことだと思うのです」

辛そうに、尼僧は嘆息する。それだけ意志と決意と心とを言葉に尽くされても、なお承服しかねるという意を自らの内で反芻するように、口許を引き結んだ。

「下手をしなくても、あなたは死にますよ。それでも良いと……」

「……………はい」

「東の水がこちらに争いを吹っかけてきて、こちらが応じてしまい、この郷がかつての争乱の時代に帰る危険性があるのですよ」

「……………はい」

「何より、あなたがいなくなって、あの娘はさぞ哀しみに暮れることでしょう。怒り、憎み、正しく刀を振るえなくなるやもしれません」

春花は、瞳の彩を静かに灯し、ゆっくりと頷く。

「それを、超えるための賭けです。そして、私はあの娘の可能性と、未来を信じています。そのために、この命が果てようとも惜しくはなく、哀しくもありません」

ヒグラシが、静かに、物悲しく鳴いている。

読経は続いている。

尼僧は、自らの手前に据えられた湯呑を手取る。蓮華の絵が底に見える。茶の水面に、茶柱が倒れて浮いていた。

「そうすることで、新たな火種を孕むことになるやもしれませんね。もし、それでこの郷がかつてのような争乱と、民の苦しみの場となるようならば、私は

あなたを省みない決断をすると、予告しましょう」

「ええ。それで構わないわ。だったらこそ、私は私の視たモノと、次代の可能性のためにこの命をちゃんと使い果たせるというものです」

「決意は、固いと」

「はい」

「必定に従うばかりでは、死んでいるのと同じ、か」

「はい。血刀で視るモノは、どこかで否定するのが獅士堂緋蓮の宿業でもあります」

尼僧は、瞼を閉じる。その暗幕の裏に浮かぶのは、目の前の御転婆娘と共に過ごした時間だろうか。

「あなたは、あの娘のためだと……自らのエゴでもあると言うけれど、本当は、その殿方が素敵なだけではないでしょうね？」

ずず、と茶を飲む尼僧に、春花は、あはははと声をあげて笑った。

「やっぱり、わかっちゃう？」

「ふう。仕方のない子ね。好きになさい。けれど、悔いなく、幸せを掴めるように、心しなさい」

「はい。ありがとうございます……、先代」

2

それは、葉月も下旬に差しかかる日のことだった。

獅士堂の狭みなが意気軒昂に騒がしい夕餉の席で、一息をつく段になって、春花は皆に話があると切り出した。何事かと、あるいはザワつき、あるいは大したことではないだろうと酒を舐めながら春花の方を見遣った。

その中に居た雪絵は、もしかすると『あのこと』がついに皆に広く告知されるのか、と食事を納めたばかりの胃の中が嵐のように逆巻いた。

春花は言った。それは、厳かでもなく、気負う事もなく、気楽で、しかしはにかむような照れたような、少女味のある顔だった。酒を飲んでもいないのに、

若干上気していたように、皆には視えた。そして、告げられた言葉。

「私、今度結婚するから」

えへ、と小首を傾げてみせる春花。だが、その反響は凄まじかった。

まさしく、嵐である。怒号のように裂帛の叫びが起こり、それと共に、組の
侠たちが春花に詰め寄った。

「ええええええっ!!」

「姐さん、マジですかッ!! ちょ、え、結婚.....って!!」

「本気ですか!! 信じられねえ!! うわあッ うわああ.....っ」

「くっそ、本当だとして、どこの馬の骨だ！」

「許せん!! 俺らの姐さんを娶るなど! やらせはせん! やらせはせんぞッ!!」

「いかん、俺、酔ってるんだこれは幻聴だ。これは酔夢だ。あはははは.....」

一様に、また様々に、思い思いの丈で、好き勝手な話をし始めるその狂騒を、
パンッ と手を叩いて一瞬で鎮めると、春花は笑う。

「これは本当なのよ。実はもう、先月の末から話は動いているの。ごめんね、
黙っていて。そこは謝るから、どうか祝福してくれると嬉しいわ」

そのいつもの有無を言わせない、力ある笑顔に一同はごくりと唾を呑む。何
を言ったものか、何かを言って通じるものかと逡巡する、人を刀で斬る生業の
強面たち。

そこに、一人の低い声が皆を割って近づいてくる。

「お前、そんな話を事後承諾か。随分と勝手だな」

「白峰さん.....」

若干、顎を引いて、春花は正面に来て座る白峰を見返す。

「白峰さん! あんたからも言ってやってくださいよオ!!」

「姐さんが盗られちゃいますよオオン! 断固許すマジ!」

「はっ!! そうだ、これはいつもの姐さんジョークでは! 白峰の旦那、さくっ
と撃破してくださいよ〜っ」

あーッ! 騒がしい!!、と適度に強く喝を飛ばして、白峰は前かがみになり、
春花をじろりと睨み据える。

「皆もこう言っとるが、お前、その話は本気で言っとるのか」

「……ふふ。これが本当なのよ」

改めてそう言い切るので、皆も改めて、ええ〜っ と意気消沈と反感と不満の空気を拡げていく。

「それにしては、一月前から進めていたとは……儂にすら黙っていたというのは、いささか穏やかに済ませられんな。何故黙っていた。皆にもそうだぞ」

「そうね……、黙っていたことは、重ねて詫びを入れさせてもらうわ。堪忍してね。けれど、先の電波塔の件や、諸々の仕事との折り合いで、言い出しづらかったのよ」

白峰は眉間にしわを寄せる。

「勇侠で知られるお前らしくなく、少し臆するところがあるな。お前、他に言い出し難い事情があるのではないか？」

雪絵も、座したまま軀を乗り出し、人垣の隙間からチラチラと視える春花の様子をうかがう。左馬ノ介は隣で、そんな雪絵の顔を視ている。そして、彼は思いの外その顔が不安や焦燥に染まっていないと知る。

「白峰さんに嘘はつけないか……。そうね、実は言い出しづらかった理由は、もっと他にあるの。多分、それを事前に前提として語りだしたら、今の五倍は猛烈な反応がくると思って」

「それで事後承諾か」

ふん、と三白眼で春花を睨む目を横に切る白峰。

「どうせ、あの人にだけは了解をとってあるんだろう？ 切ない話だな」

「あはは……それもばれてるのね。拗ねないでくださいよ」

「ぬかりないというか、本筋は押さえてあるというか、どうもちよくちよく夕餉の席に私用でおらんと思ったら、仕事の隙間にそんな画策をしておるとは…」

「画策って、酷いなあ。私と、組の幸せのための活動じゃない」

「お前の幸せなア……。まあ、お前ももういい歳だし、こういうことを考えてもおかしくはないんだが……」

口ぶりが理解を示し始める気運に、白峰の周りの男衆が息せき切って食い下がった。

「ちょっと！ 納得するみたいにならないでくださいよ！」

「そうだ！ 俺らは認められないっす！ 姐さんは皆の姐さんっす！」

「……くっ、だが姐さんが幸せになるのは、少し応援したくもなくもないが…
…ああああアアアッ!! やっぱり駄目だア!!」

「姐さん！ 俺が幸せにしますから、結婚は俺と！」

「てめえ！ 何どさくさに積年の想いぶちまけてんだッ ふざけんな！」

気持ちは一致していながら、どこか皆方向がばらんばらんで場は掴み合いの殴り合いの体を為してきた。こういうところは、侠客の鉄火の気質である。

「止めんか！ やかましいッ!! 話の最中だ！ たたっ斬るぞ！」

普段は厳しいことを言わない白峰の、そのセリフの違いが分かった一同は、彼の内の静かな怒りもまた理解した。

「組の幸せにもなると言ったな。お前、勢力間の変動があるような家柄の者と結婚する気か。相手は少なくとも、堅気ではないということか？」

今度は、白峰の示す話の容貌に皆はざわついて、また唾を呑み込む。

「つまり、認める認めない、黙っていたことや事後承諾以上に、儂らに話をするなら言わねばならん事があるだろう？」

白峰は言う。

——相手は誰だ？

と、壮年の彼が若返ったように目に若い熱をもった潤みのある光りで睨んだ。

それでも、春花は微笑んで、そしてやや歯切れ悪く返す。

「うーん、まあ、言わなくちゃ話にならないわよねえ」

「当然だ」

「少し、言うのに心の準備がね」

「それを済ませたからこそ、今の席で切り出したんだろうが」

「そうねえ、でも皆、驚くわよ？」

本題を引きずり出すのに粘られて、白峰はいつものように春花のペースだと

危ぶんで、一呼吸置いて、続けた。

「お前と一緒に過ごしてきた者は、そんなことの四つや五つは経てきた。もっ
たいぶらずにずばっと言わんか……」

皆が周りを囲み、無言で見つめてくるのが、白峰だけではなく、彼ら全員が
そこを真に問い質したいのだと訴えていた。当然だが、結婚すると言い出して、
それをきく周囲が相手がどこの誰だか分からないのでは、はいそうですかと首
を縦に振るわけがない。

春花はやはりそうなるよなあ、というか、皆の対応に自分の方が納得する思
いで——この辺は素が自由な気質なので、誰と添い遂げるかは究極的に自分の
自由だという気持ちもあるのだろう。立場がありながらも、それに捉われない
彼女だから——しかし、やはりその立場がある者として、社会の道理やスジは
通さねばならない、と息を吐く。

「実はね、」

ごくり、と男衆が、白峰も、雪絵も、左馬ノ介も、春花の言葉に耳を傾ける。
「お相手の名は、高杉湊奈人と言うわ。彼は、さる組の次期頭首候補でもある
そうよ」

「高杉……、湊奈人……………?!」

白峰は、ぼっと背中に毒の冷液でも流し込まれたように身を起こす。その歯
の根が彼にしては落ち着きなく戦慄く。

「白峰さん？」

「その高杉某ってのは、御存知なんで?!」

「どこのどいつですか？ っつか、次期頭首候補って……」

微かに震える指で、白峰が春花を指す。

「お前……、本気か……？ あの組の者と、しかも頭になりうる者との縁談だ
と?!」

場の注目が、春花と白峰を行ったり来たりして、話題の答えを求めて焦がれ
た。

その喧騒の枠の外で、静かに彼らを見守る左馬ノ介が、一人その名に反応し

ていた。

「高杉……。その名……」

「知っているの？ 左馬ノ介」

「ああいえ、俺からは口にするつもりでもないでしょう……。しかし……」

それは、と左馬ノ介は口許を手で覆う。

確かに言い出しづらいただろうし、言えば大反対必至だ。例えある程度のスジを逸していようとも、水面下で当事者間での合意と話しの進行をして、周囲には事後承諾にしたいという、そういう手を回した春花の気持ちも分かろうというものだった。

だからといって、組の頭としての結婚という一大行事に際して、ここは避けては通れないところだ。春花も一応はそれを分かっている。理解し、自分の心で納得し、実行しようとしている。

しかし、彼女は強い武侠であり、獅士堂一家の頭梁でありながら、一人の女性——恋多き女性としての側面も同時に持っている。その恋の集大成が、大きく大多数に反対されるとわかっているのならば、及び腰になるのも人情だ。

しかし、この時、春花は遠くから、座し、自分を見詰める黒い髪の娘とかすかに目が合った。そして、その黒い真珠のような輝きを、瞼を閉じることで己の網膜に仕舞い込む。

春花は彼女——雪絵のことを想う。

それで、言葉が出た。春花は言う。

「湊奈人さんの組はね、東の大家、辰ノ神一家。私は東西二大家を、この婚姻で結び付けられれば、とも思う」

何より、私と湊奈人さんがラブラブなんだけどね。

春花はそう言った。座したままに、静かに白峰を——周囲の皆を見渡す春花の表情は、後悔なんて微塵もない顔をしている。これから始まる可能性を掴む、その為だけに、春花はこの婚姻を決めたのだと皆に告げた。

反応は、あった。

更なる嵐が巻き起こった。

五章 太刀の巻

男衆が若きは困惑し、中高年層は激怒した。白峰は腕を組んで口を噛みしめ、左馬ノ介は思案顔をした。そんな中、雪絵は、今はまだ、静かに茶を飲んでいった。

.....続く。